
イン・ザ・クローゼット

ゆりかご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イン・ザ・クローゼット

【Nコード】

N7284C

【作者名】

ゆりかご

【あらすじ】

二人の妹を探して、アレットはクローゼットの中に飛び込んだ。そのころ「クローゼットの中」で、ウサギ耳はやってくるはずの花嫁を探していた。アリス風味のエセ児童文学ファンタジー。

イン・ザ・クローゼット 1

いまさら妹たちの面倒を見ることには慣れているけれど、こんなのはあんまりだわとアレットはため息をついた。お母さんはお姉ちゃんなんだからと言うけれど、アレットだって本当はまだ十四歳で、たまには甘えてみたい時だってあるのに（正直、ママンなんて呼んでみようかな、と思う時にかぎって妹たちが「ママン、ルイーゼがあたしのお人形盗ったあ！」「ちがーう、シャルロットがあたしのリボンを先に使ったのよう、ママン！」とか叫び出すのはうんざりだ！）。

今日だって、ママンとパパはお出かけだから三人でいい子にお留守番よ、とうるさいくらいに言っておいたのにこの騒ぎだ。もうあんな妹たちなんて放っておいてベッドでぐっすり寝てしまいたいんだけど、きつと帰ってきて二人がいらないことに気がついたらママンもパパもすごく哀しむにちがいない。アレットはお姉ちゃんだったので、十四歳にしてはそういうことに気が回るようになってしまった。

しょうがないわ、二人を捜しに行かなきゃ。アルバムからはがしてきた家族の写真をポケットに入れると、アレットは床の上に置きっぱなしの大きな本を持ち上げた。革張りの、パパの書斎のガラスケースに鍵をかけて入れてあるような本で、アレットにも妹たちがどこからこの本を持ち出したのか、さっぱりわからなかった。ちよつと読んでみたところによると、どうやら二人は今紫色の花が咲き乱れるお花畑を超えたところらしい。

「大変、早くしないと」

アレットは急いでその大きな本をカバンにつめこむと、妹たちの部屋に駆け込んだ。うすく開いたままのクローゼットを深呼吸して両手で開けると、そこには明るい銀色の霧のようなものがもやもやと浮かんでいる。まったく夜中にこんなところを開けたりするから

落つこちちやうのよ、とぶつくさ文句を言いながら、アレットはえいっとばかりに霧の中に飛び込んだ。

霧の中は——幸運にも！——しばらくまっすぐな道が続いていてアレットが迷ったりすることはなかったけれども、馬鹿みたいに延々と道が続いていた。先へ、先へ、もっと先へ。

大きな本を持って歩いているおかげで——もちろん普段ならこのくらいでつかれたりはいしないのだけれど——アレットがへとへとになったころ、ようやく霧は晴れて目の前に芝生が広がっているのが見えてきた。作り物なんじゃないかとアレットがちよつとうたがうくらいきれいな芝生で、向こうの方には川があつて赤い鉄橋がかかっている。足下の小径は、どうもその鉄橋に続いているようだった。あの子たちもここを行つたのかしら、でも景色はよく見えるけど、空はまだ夜なのに、とアレットは小首をかしげた。

「失礼ですがお嬢さん」

その時突然後ろから声をかけられて、アレットは悲鳴を上げそうになった。だってわたしは後ろから来たのに、どうしてわたしの後ろに人がいるのかしら。

「あ、ちよつと、そういう反応は傷つくよ、やっぱり。あのですね、できれば助けてほしいんだけど、お嬢さん」

ふりかえってみると、アレットの足下よりは少しはなれた場所にいとこのお兄さんと同じくらいの見た目——お兄さんは去年から大学に通っているのだけれど——の男の人が埋まっていた。身体の上半分だけが地面からによつきりと顔を出していて、しかも彼の頭にはウサギの白い耳が生えている。アレットは、シャルロットがこの前工作の時間に作ってきた、変な形の人形を思い出した。

わたし、この人と話したくないわ。それでもしぶしぶおじぎをした自分を、アレットは褒めてあげたいと思った。

「……ごきげんよう。ところでそれって、なにかの罰ゲームなんですか、お兄さん」

「あんまりごきげんよくはないけどね。罰ゲームというか、ちよつ

と読書にのめりこみすぎてしまつてね、お嬢さん」

ほら、とウサギ耳が身体の根本を指さした。おそろおそろのぞきこむと、なるほど彼は地面から生えているのではなくて、本から生えていた。でも、読書にのめりこむとこんなふうになるっていうのは初耳——それとも初目っていうのかしら、とアレットはちらりと考えた——だわ。

こまつている人は助けてあげなさい、とママンはいつも言っている。本当はこんな変な人は無視してしまいたかったのだけれど、アレットはしかたなしに——ひよつとしたらこの人はシャルロットとルイーゼを知っているかもしれないし——ウサギ耳をよいしょと引っ張つてみた。

「ありがとう、お嬢さん！ あ、でもちよつと、引つかかつてるよそこそこ、痛いって——もうちよつとやさしく」

して、とウサギ耳が言い終わる前に、彼の身体はすぽんと本から抜け出した。勢いで後ろ向きに転がりそうになったアレットを、その耳に似つかわしいすばやく、軽い身のこなしでかばうと、ウサギ耳は大丈夫かい、お嬢さんにとっこり笑った。それからやれやれとため息をついて、今まで自分がはまつていた本をひろいあげて土埃をはたき落とした。アレットはその間、目をまるく見開いてウサギ耳をながめていた。

ウサギ耳はまるきりアレットのような人間と同じ格好なのに、頭にはやつぱり何度見直してもウサギ耳が生えていて、本の中から出てきた下半身には尻尾までついていていた。それに真つ白な燕尾服を着て、さつきは気づかなかつたけれど、クローバーを編んで作った小さな王冠までかぶっている。仮装パーティーみたいだわ。アレットはこっそり肩をすくめた。

「いや本当に助かったよ、お嬢さん。どうしようかと思つてたんだ。ところで僕を助けてくれたかわいい方、名前は？」

「アレットと言います。ちよつとおたずねしたいんですけど」

ポケットから写真を出して、ウサギ耳に差しだした。

「この二人を見ませんでしたか？ わたしの妹なの」

ふふん、と興味深そうに鼻をならして、ウサギ耳は写真をじつくりとながめた。それからさっきの本をぱらぱらとめくって、もう一度鼻をならした。

「あいにくだけど、僕の本には書いていないみたいだ、お嬢さん。君の本には書いてあるんじゃないのかい？」

それにどうせ行くところなんて、ひとつしかないよとウサギ耳は意地悪そうに笑った。ひょこりと長い耳をゆらして、遠く、赤い鉄橋のかかる川の向こうを指さした。あいにく暗かったので、そちらになにがあるのかアレットにはよく見えなかったけれど。なにがあるの、とアレットが聞くと、ウサギ耳はお城だよ、お嬢さんと教えてくれた。

「ちよつと本を見てごらん。妹さんたちはお城にいるんじゃないかな」

「暗くて見えません。ランプも持ってないし」

「なんだ、そんなこと。ほら——これで見えるだろう、お嬢さん」
ウサギ耳はポケットから小さなガラスびんを取り出して、くると試験管をそうするように軽くふった。そのビンは、ぽうつと赤いような金色のような色に光っていた。朝焼けみたいできれいな色、とアレットはため息をついた。

ウサギ耳の出してくれたランプを頼りに本を開くと、シャルロットとルイーゼはなるほどお城にいるらしい。「王子様のお嫁さんになるのはあたしー！」だの「ちがーう、あたしだもん！」だのと、聞いているだけで（実際にはアレットは「見て」いたのだけれど）頭が痛くなりそうな言い合いをしている。これは早く行かないと、どちらかひとりくらいは王子様と本当に結婚してしまいそうだ。

「お城にはどうしたら行けるのかしら。行き方を知りませんか？」
アレットがこまって首をかしげると、ウサギ耳はぱたぱたと何度かまばたきをした。

「お城に？ 行くのかい？ ものすごく遠いよ」

「でも行かなくちゃ。あの子たち、たぶんちよつと冒険のつもりで来ただけだと思っんです——そのくせそういう時つて、帰り道とかなあんにも知らないんだから！ あの、本当にお城に行く方法、わかりませんか？」

ウサギ耳はやれやれとひとつため息をついてから、お芝居の役者のように深々とおじぎをして、ご案内しますよ、お嬢さんと器用にウイंकをしてみせた。そうすると、ウサギ耳はちよつとだけかっこよく見えた。

「僕はお城は慣れてるんだ——そう、とてもね！ 汽車に乗ると早いんだよ、お嬢さん」

「でもわたし、お金を持ってません！」

汽車になんて乗れないわ、とアレットがうつむきそうになると、ウサギ耳はそんな顔をしないでとあわてて手をふった。さっきガラスびんを出した方とは反対側のポケットをさぐつて、今度は黒と白のチェック柄をしたチケットを二枚出してみせる。そうしてウサギ耳は一枚をアレットに差し出した。

「僕からのプレゼントだよ、お嬢さん。言っただろう、僕はお城は慣れてるつて」

チケットを見てみると、そこには「ひとつめの鉄橋駅→お城」と書かれていた。ひっくり返すと、「特急列車。各駅には止まりません」と書いてある。なんだかものすごく高そうなチケット、とアレットは思ったし、こんなものをもらうのは悪いんじゃないかしらとも思っただけれど、前にパパが人のくれるものはなんでももらっておきなさい、と言っていたことを思い出して、素直にありがとうとお礼を言つた。

「お礼はけっこうだよ、お嬢さん。その代わりに、僕も一緒に行つてもかまわないかな」

「そんなこと、全然かまわないわ。それにあなたはお城に慣れてるんでしょ、案内してくださるとうれしいわ」

ウサギ耳はうれしそうににっこり笑つて、ついでに耳もひょこん

とゆらして、それじゃあ一緒に行こうかとアレットの手をうやうやしく取った。

「駅までは遠いのかしら」

「なんてことはないよ——ほんのひとつ跳びだね。しっかり僕の手をにぎってるんだよ、お嬢さん！」

ウサギ耳は力いっぱい地面を蹴って、ひとつめの鉄橋駅に向かって跳んだ。

イン・ザ・クローゼット 2

「ほら、ほんのひとつ飛びだつたらう、お嬢さん」

あれだけびゅんびゅん飛び跳ねておきながらけろりとした顔でお茶を飲んでいるウサギ耳を、アレットはうんざりしながら見上げた（というのも、アレットは汽車のシートに寝転がっていたからだ。アレットはウサギ耳のように飛び跳ねることには慣れていなかった。で、ほんのちよつと気分が悪くなってしまうていた）。

「そうですね——でもどうせひとつ飛びなら、もうちよつとゆつくり、歩いてきてもよかったんじゃないかしら！」

「僕たちが歩いてくるのを待ってたんじゃ、特急列車にならないじゃないか、お嬢さん」

アレットはもうウサギ耳と話をするのはあきらめて、特別に注文したアイステイーを一口すすった。それで少し気分が良くなってきたので、妹たちの様子をたしかめてみることにした。本を開くと、なにも言わなかったのにウサギ耳がさっきのガラスびんを出してくれた。

二人は相変わらず、どちらが王子様のお嫁さんになるかということとでけんかをするのに忙しいらしい。アレットはその時になって、そういえばあの二人はお城にいるのに本にちつとも王子様が出てこないのは不思議だわ、と思った。

「ねえ、お嬢さん」

ウサギ耳がおずおずと——その様子は実に彼らしくなかった——声をかけてきたので、アレットは本を閉じた。なあに、と聞いてやると、ウサギ耳は頭にのせていたクローバーの冠を一度外して、かりかりと頭のでつぺんを指で搔いた。照れているような、緊張しているような、不思議なしぐさだった。

「あのねえ、もしも——もしもなんだけど」

「はい、なんですか」

「お城に行つて、王子様が君と結婚したいつて言つたら、君はどうするか」

アレットはおどろいて、ちよつとすぐに答えることができなかった。王子様がアレットに結婚を申し込んだら？ 考えたこともなかったけど、たしかにわたしだつてお城に行くんだし、そういう可能性もあるわけよね。

けれどもアレットはそもそも妹たちを連れて帰るためにここに来たのであつて、王子様と結婚するために来たのではない。そうなつちやつたら、そういうのつてどう言ふんだったかしら、とアレットは学校で習つたことを思い出そうとしてみた（そしてすぐに、「ミイラ取りがミイラになる」という言葉を思い出した。アレットは妹たちとはちがつて、学校の勉強がきらいではなかつたのでそれほどむずかしくはなかつた）。

アレットはうーんと考え込んで、注意深く言つた。

「それつて、すごくむずかしい質問ですね。だつてわたしは王子様と結婚するためにここに来たんじゃないもの！ ……でも、そうなつたらちよつとすてきなとは思いますが」

その時、ウサギ耳が飲んでいたお茶のお代わりを客室係が持つてきた。どういうわけかその客室係は日曜日に行く教会のシスターのような格好をして、首から金色のロザリオを下げていた。客室係はていねいな手つきでウサギ耳にお茶を入れてあげながら、アレットにほえみかけた。

「それじゃああなたは王子様と結婚して、妹たちも連れて帰ろうと言ふのかしら」

少し欲張りすぎじゃない、とても言いたそうな調子だったけれども、客室係はきちんとアレットにもお茶をくれた。ただ、カップを置く時に、ウサギ耳にそうした時はちつとも聞こえなかつたがちゃんと音が出たのを、ちゃんとアレットは聞いていた。

「ひとつのことをつかむのはいいけれど、他のことから手を放してはいけないと言いますよ」

格好がシスターみたいなら、言うこともシスターみたい。アレツトは正直なところさっぱり意味のわからない言葉に、肩をすくめた。「二兎を追うものは一兎をも得ず、って意味だね、つまり」

自分もウサギのような見た目のウサギ耳がそんなことを言ったものだから、アレツトは思わず小さく吹き出してしまった。

お茶の道具をかたづけると、シスターはつつしみぶかくおじぎをして、金色のロザリオをちらちら光らせながら次のコンパートメントに向かった。それを見送って、ウサギ耳はさっきのは忘れてくれてもいいよ、お嬢さんとちょっとさみしそうに肩を落とした。アレツトはすぐに、王子様が結婚したいと言ったら、という話のことを言っているのだと気づいた（そう、アレツトはウサギ耳が話をむしかえすまで、そんな話をしたこともほとんど忘れていた！）。

けれどもウサギ耳は、忘れていいと言ったくせに切なげにため息をついたり、わざとらしく自分の本をめぐってみたりして、うつとおしいことこの上ない。アレツトは、無視するのはちょっとかわいそうかしらとも思ったけれど、相手をするのもなんだか気が重くて寝たふりをして窓の外をながめた。

汽車は特急というだけ速くて、もう七本目の鉄橋を越えてしまっていた。線路はゆるやかなカーブを描いていて、後ろの方に赤い鉄橋と月にきらきら輝く川の水面が見えていた。妹たちもこの風景を見たのだろうか。けれども彼女らは汽車のチケットを持っていなかったから、ひよつとしたら歩いてお城まで行ったのかもしれない。汽車に乗ってからもうずいぶん時間が経っている。こんなに長い距離を歩くのは、まだそれほど大きくはない二人にとっては、ずいぶん大変だっただろうにとアレツトは小さくため息をついた。

そういえば、わたしがここに来てからもうずいぶん経つのに、まだ朝にならないのね。アレツトはふと、ウサギ耳が持っているガラスびんの光が朝焼けのようだったことを思い出した。あの中に入っているのは、ひよつとしたら本当に朝なのかもしれない。一生懸命ビンの中に朝焼けを集めようと飛び跳ねるウサギ耳を想像して、ア

レットはくすりと笑った。

その笑い声を聞きつけて、ウサギ耳は本から顔を上げた。どうかしたのかい、とでも言いたげに首をかしげた姿に、アレットは、今度は彼とおしゃべりを楽しみたいと素直に思った。

「ちょっと聞いてもいいですか」

ウサギ耳はとたん、うれしそうにぱつと笑った。

「なんでもどうぞ、お嬢さん」

ありがとう、と返しながら、さてなにをたずねようかしらとアレットは考えをめぐらせた。ウサギ耳が読んでいる本の中身？ それともお城について？ どちらもおもしろそうではあるのだけれど、いまひとつ気乗りがしない。悩んだあげくに、じゃあ、とアレットはこう聞いた。

「あなたは どうして あんなところを、こんな時間に歩いてたんですか？ わたしなら ママン や パパ に 怒 ら れ ち ゃ う わ」

もちろんウサギ耳はアレットよりもずっと年が上のようなから怒られはしないだろうけれど、でも外を——しかも本を読みながら——歩くには、ちょっとどころかなり遅い時間だ。そう考えると、ちよつとあやしいのよね、この人。アレットはじいっとウサギ耳の赤い目をのぞきこんだ。

「それはちよつとむずかしい質問だね、お嬢さん！ でも、まあ、なんでもどうぞと言ったのは僕だからね、ちゃんと答えるよ」

ウサギ耳は、さつき「王子様がアレットと結婚したいと言ったらどうするか」という質問をした時のように、クローバーの冠を外してかりかりと頭を掻いた。どうやらこれは言葉につまった時に彼がやるクセらしい。

「そう、つまりね、僕は僕の花嫁さんをさがしてたんだ、お嬢さん」
「それで本を見てたのね！」

アレットがぱちんと手を打ち鳴らすと、そのとおり、とウサギ耳は拍手をした。

「あの辺りにいるって本に書いてあったから、汽車に乗ってね——

帰りのチケットまで買って」

アレットは身を乗り出してウサギ耳の話を聞いた。こういう話は好きだった——学校で仲のいい友達と、だれとだれがキスしたらしい、といううわさ話をするよりも、もつと興味をそえられる。

「でも見つけれなかったんですね？　だって、チケットはわたしが使っちゃったから——」

「いいや、見つけたよ、ちゃんとね」

ウサギ耳はにっこり、実に人がよさそうなふうに笑って、アレットの手をぎゅつとにぎった。ウサギ耳の手はとてもあたたかくて、アレットはそのあたたかさよりも、むしろ自分の手が冷たかったことにびつくりした。一瞬心臓がどきんと跳ねたのを、アレットはその温度差のせいだと思ったかった。

「本にも書いてあった。僕の花嫁さんは、アレット、君だ」

アレット、と名前を呼んでくれた時、ウサギ耳はとても真剣な顔をしていた。やっぱりこの人、けっこうカッコいいんだわ。場違いにそんなことを思いながらも、アレットの心臓は勝手にとくとくと早い鼓動をきざんでいた。

これって——恋なのかしら、とアレットは思った。いきなり手の中に降ってきたウサギ耳からの告白と自分の感情に、アレットはまだ慣れていなくてとまどった。恋だとしたら、ウサギ耳は悪い人ではないようだし、彼の花嫁になるのもすてきなこともしれない。

でも、とも思う。でも、アレットは妹たちを連れて家に帰るためにここに来たのであって、王子様とはもちろん、ウサギ耳と結婚するために来たのではない。妹たちだけを家に帰しても、ママとパパは哀しむだろうし。

その時がたと大きく汽車がゆれて、車掌がどこかで「お城ー、お城！」と乗客に伝える声がした。ウサギ耳ははっと我に返ったようにアレットの手をはなして、着いたみたいだね、と窓の外に目をやった。そのしぐさは、なんだかアレットから目をそらしているように見えた。

「行こうか、お嬢さん。妹さんが待つてるよ、きっと」

あまりにウサギ耳の態度が先ほどまでとはちがってひどくうたえてしまったアレットの手を、今度は片手で彼はそっと取った。少し力をこめてアレットを立ち上げらせながら、ウサギ耳は苦笑いを浮かべて言った。

「さっきのは忘れてくれてかまわないよ、お嬢さん。それに——その方が、きっと君にとってもいいだろうからね」

「え、それはどういう」

意味なんですか、とアレットがたずねるよりも早く、二人は汽車を降りていた。

イン・ザ・クローゼット 3

汽車が停まっていたのはお城の中庭のようなところで、外に出てみると、全員似たような顔をした兵隊がずらり、あかあかともされたランプを持ってならんでいて、その奥にクローバーの冠をかぶり、ウサギの耳を持つ男の人と女の人が立っている。二人はともえらそうだったので、アレットはあれが王様と女王様ね、と思ったそれからその横に、鎖でつながれたシャルロットとルイーゼ。本で見た時は威勢よくけんかをしていたのに、今はすっかりしょんぼりとしている。

思わず二人の名前をアレットが呼ぶと、それぞれ「ごめんなさい、アレット！」「もう勝手に遊びに行ったりしないわ、アレット！」と泣きながら叫んだ。ウサギ耳は、これは一体なんの騒ぎですか、と王様に顔をしかめてみせた。

「この二人は陛下をたばかったのだ！ 川を渡らずにここに来るなど——それで王子と結婚しようとはなんたることか！」

王様がなにか言うよりもずっと早く、女王様がきんきん声でわめきたてた。それで、なるほど、つまりあの子たちはズルしてここに来たのね、とアレットは納得した。女王様があんなしかめつらで怒る理由もわかるけど、だからってシャルロットとルイーゼをあんなふうに鎖でつなぐなんてひどいわ。アレットは思わずさがるようにウサギ耳を見やった。

ウサギ耳は敏感にアレットの視線に気づいて、大丈夫だよ、お嬢さんというふうにウインクした。それから王様の方に向き直って、こう言った。

「その子たちはこのお嬢さんの妹さんなんだそうですよ。ちょっとしたまちがいなんだし、帰してあげていいんじゃないでしょうか——」

「はて、このお嬢さんと言うと？」

またまた王様を押しつけ、ずいっと身を乗り出して、女王様はアレットをじろじろとながめた。それはもう、頭のとっぺんからつまさきまで。アレットは、ずいぶん失礼な人だわ、と思ったけれど、どうやらウサギ耳は王様とも女王様とも親しい知り合いのようだし、おとなしくしていないとシャルロットとルイーゼは返してもらえないかもしれないと思つてがまんした。

女王様はずいぶん経ってから、これは、と感動したような声を上げ、となりの王様の肩をかくかくとゆさぶりながらやっぱりきんきん声でこう言つた。

「冠をかぶつておる！ 冠をかぶつておるではないか、この子は！」シャルロットとルイーゼが女王様の大声に飛び上がつて、それからアレットを見てからきやあ、と叫んだ。「本当だわ、冠よアレット！」「王子様と結婚するの、アレット！」——ちよつとはだまつてよ、わたしだつてわけがわからないんだから、とアレットは混乱しながら思つた。

「冠と言つと、女王よ」

弱々しい声で言いながら、王様はなんとか女王様の手から——それと、その手が起こすともない振動から。アレットは、王様だつてムチウチにはなりたくないわよね、と妙に納得した——逃げ出そうとした。

「その子どもは、つまり王子と結婚しなくてはならないということだろうか」

王様がそう言い終わるよりも早く、アレットは自分の頭をおそるおそるさわつてみた。指になにかやわらかい草のようなものが当たつて、さぐつてみると、それはぐるりとアレットの頭をまわつていた。これつてひよつとして、女王様の言うとおり、冠なのかしら。

アレットがその正体を外してたしかめてみようとしたところで、ウサギ耳が哀しそうにほえみながら鏡をわたしてくれた。のぞきこむと、アレットの頭の上には、ウサギ耳がかぶっているのとそっくりなクローバーの冠がちょこんと乗つかつていた。だから言つた

だろう、お嬢さんとウサギ耳が言った。

「君は僕の花嫁さんだって」

アレットがなにか言うよりも早く、女王様は、それまで——このたいそうな騒ぎにもかかわらず！——だまってずらっとならんでいたたくさんの方隊たちに重々しく宣言した（どうやらこの国では王様よりも女王様の方がえらいらしかった。少なくとも、そうふるまっている）。

「そういうことでございますな、陛下。さて、そうと決まれば、これよりこの娘と王子の結婚式を始める。だれか、神父を呼ぶがよい！」

「そんなのこまります！」

みんなが——女王様も王様も二人の妹も兵隊たちも、みんなが。ウサギ耳だけは眉をぎゅつとよせて、こまった顔をしていたけれども——アレットの方をびつくりしたように見た。アレットはたくさんの人たちにいつせいに見つめられて、少し居心地が悪くなりながら続けた。

「だって、わたしはシャルロットとルイーゼを連れて家に帰らなきゃならないんです。その二人のことですけど」

言いながら指さすと、二人はアレットお、と情けない——けれどもどこかうれしそうな——声でアレットを呼んだ。そうよ、わたし、やっぱり結婚なんてできないわ。ママンもパパもそれはとても心配するだろうし、なによりやっぱり、シャルロットとルイーゼを見捨てることはできなかった。

「娘よ」と王様が弱々しい声で言った。

「そなたがなんと言おうとも、これは決まりだ」

女王様は大きくうなずいて、古い決まりごとなのだ、としかめつらをしてみせた（女王様はもとしかめつらをしていたので、ものすごい顔になった）。

「規則四二七。冠をかぶってお城に来たものは、王子と結婚せねばならない——」

ちなみに、とウサギ耳がこつそり言った。僕が出かける時には、そんな決まりはなかったよ、お嬢さん。ウサギ耳は汽車の中で忘れてくれてかまわないと言ったとおり、全面的にアレットの味方をしてくれるつもりだった。

「でたらめじゃない、そんなの！ だいたい、古い決まりなら番号はもつと前のはずです！」

「おだまり！ 神父はまだ着かぬのかえ——良い、お前たち歌をうたえ！」

女王様が命令すると、兵隊たちは一斉にランプを高く掲げて「ハレルヤ！ ハレルヤ！」と、ひとりずつ音も高さもめちやめちな声でがなり出した。アレットとシャルロット、ルーズは思わず耳をふさいだけれども、王様と女王様、そしてウサギ耳は大声にはまるで気をかけていないようだった。あの耳は飾り物なの、まったく！ アレットは思わず顔をしかめた。おまけに停車したままだった汽車がボーウボーウと派手な汽笛の音を立てて、火花をどかどか打ち上げる。終いにはお城の鐘がガラゴロンと頭の割れるような鳴り方をして、これにはさすがにウサギ耳も耳をひょこりと動かし（うるさいな、くらいは思ったのかもしれない）。

「もう、こんなのがまんでできない！」

あんまりうるさすぎるし、人の話を聞かないにもほどがあるわ。アレットは叫んで、頭の上の冠をわしづかみにして地面に叩きつけた。するとやわらかい草でできているはずの冠は、がしゃんとガラスのような音を立ててこなごなになって砕けてしまった。

その瞬間、いろいろなことが——本当にいろいろなことが——一度に起きた。

兵隊たちの持っていたランプからぼうつと火が飛び出して、近くの木や草だけでなく、兵隊たちにも燃え移った。兵隊たちはおたがいにつかり合ったり、転がったりして身体についた火を消そうとした——そんな状況なのに彼らはまだ歌をうたっていて、アレットはとんでもなくびっくりした——けれども、火はメラメラと燃え上

がつて、とうとう兵隊たちは消えてしまった（それでも歌声は消えなかった）。王様は、まるで風船の空気が抜けるように小さくなりながら、空でのんびり昼寝をしていた三日月の方へ飛んでいった。つとその端っこに引つかかって止まった。けれども月は王様が重すぎて、地面に向かってずるずると落ちてくる。ちゃんと停まっていたはずの汽車はまるでヘビのように勝手に動き出して、ボールのように弾んで落ちてきたお城の鐘と一緒にさっきアレットとウサギ耳が通ってきた川に、ものすごい音を立てて飛び込んでいった。全部、まばたきをする間に起きたことだった。

まさかこんなことになるなんて思わなかったわ！ アレットはちつとも消える様子のない火から妹たちをかばおうと、あわてて二人のところに走った。シャルロットを右手で、ルイーゼを左手でかかえて、女王様はどうしたのかしらと見てみると、

「なんとということ——無礼な娘じゃ！」

きいきいとわめきながら地団太を踏んでいた。ずいぶんマナーがなっていないんじゃないかと、女王様？ アレットが思わず顔をしかめた時、今度はぐらぐらと地面がゆれた。今まで遭ったこともないくらいの地震に、シャルロットとルイーゼが悲鳴を上げた（本当はアレットだってそうしかつただけけれど、余計に二人をこわがらせるだけだと思ったので、がまんした）。

「結婚式が台無しではないか！ なんとること——」

女王様が叫ぶと、地面はまたぐらりと大きくゆれた。アレットはぎゅっと目を閉じて、妹たちをきつく抱きしめた。そのアレットの手の片方を、だれかがぐいっとつかんだ。

「しっかり僕の手をにぎってるんだよ、お嬢さん！」

どこかで聞いたような言い方だわ、とアレットが思ったのと同時に、アレットとシャルロット、そしてルイーゼを一度にかかえて、ウサギ耳が力いっぱい地面を蹴った。お城のひとときわ高い塔に向かって、軽々とウサギ耳は跳ねていく。きやあつと長く、二人の妹が悲鳴を上げた。けれどもアレットは自分が今空中にいるのだという

ことも忘れて、きりつと前だけを見ているウサギ耳を、ぼうつとなつて見つめていた。

とん、と塔の上、張り出したバルコニーに見事な着地を決めると、ウサギ耳はそこでやっとアレットの視線に気づいて、にっこりと笑った。ちよつと憎たらしいくらいにやさしげな笑顔に、アレットの腕の中で妹たちがほうつとため息をついた。

「さあ、そろそろ君たちは帰る時間だよ、お嬢さん」

アレットにはウサギ耳の言うことが、よくわからなかった。帰る時間って言うけれど、どうやって帰ればいいの？ それにこんなめちゃくちゃなことにしちゃったままで、この人を放つて帰るなんて「わたし——わたし、このままじゃ帰れないです」

「ねえ、お嬢さん、ひとつのことをつかむのはいいけれど、他のことから手を放してはいけないって言ったじゃないか」

ウサギ耳は言いながら、ポケットをさぐってガラスびんを取り出し、アレットの手にそれをにぎらせた。ガラスびんは、あいかわらずきらきらと赤いような金色のような色で光っている。それは塔の下で燃えている炎の色とも少しちがう、夜の暗がり慣れた目を突き刺すような光だった。

「アレット、それ、なあに？」と言いながらシャルロットがびんにさわってみて、「とつてもきれいだし、なんだかあったかいわ、アレット」とルイーゼが甘えるように鼻を鳴らした。アレットは返事をすることもできずに、こまってウサギ耳を見上げた。「見てごらん、お嬢さん」と言いながら、ウサギ耳はひょこりと長い耳を動かして、空を指差した。月がさつきどこかに落ちてしまったから、それから空は真っ暗だ。星さえひとつも見当たらない。それに、なんだかさつきよりも空が近くなってる気がするわ。アレットは首をかしげた。

「月が落ちたからねえ、こつちが本当の方角かと思って、空も落ちてきてるんだよ！」

「え、じゃあ——」

「言いたいことはわかるよ、お嬢さん。その内僕ら、つぶれちゃうだろうね」

だからそれより先に帰らなきゃ、とウサギ耳はウィンクを試みせた。あまり緊張感のないしぐさだった。

ウサギ耳はアレットに、ガラスびんのコルクを抜くように言った。ふたを開ければ朝は勝手に出てくるから、とも言った。アレットは思わず言われたとおりになろうとしてちょっと力を入れてコルクを引っ張ってみてから、気づいた。

「それで、あなたはどうするの？」

どうして今そんなことを言うのかなあ、とでも言いたそうな、少し情けない形に顔をしかめると、ウサギ耳は月の落ちて行った方——アレットは川よりもこっちだと思っていたのだけれど、ウサギ耳はもつとずつと遠くだと思ったらしかった——を指した。

「僕は月を元にもどしに行くんだよ、お嬢さん」

ウサギ耳はずつと、汽車に乗るよりも前から持っていて、あの大騒ぎの中でも絶対に落としたりはしなかった本の表紙を開いた。すると何百ページもある白い紙たちが、あるものは鳥になって、あるものは蝶になって一斉に空に飛んでいった。ああ、この人の物語はもう終わっちゃったのね。アレットは少しだけさみしくなった。

さあ、早くしないとどれなくなる、とウサギ耳はアレットの手を取り、ガラスびんのコルクを抜かせた。そのとたん、びんの中に閉じ込められていた朝の光が飛び跳ねるようにあふれてあちこちに散って行った。ひととき大きな光はびんの口がせますぎて、なかなか出てこられないようだ。

ウサギ耳はそれを見届けると、さっとバルコニーの手すりに片足をかけた。まるで今にも月に向かって跳んで行ってしまうようだ。アレットはびんをシャルロットに押し付けて、待って、とウサギ耳の腕をつかんだ。

「行かないで、……わたしまだ、あなたの名前も知らないのに！」
ウサギ耳はびっくりしたように目を丸くしてから、ふとやさしい、

ママンかパパのような顔をしてアレットの頭をぼんぽんとたたいた。だからアレットは、てつきりウサギ耳は彼の名前を覚えてくれるのだと思った——悪かったね、お嬢さんとかなんとか、言いながら。

けれどもウサギ耳はなにも言わずにさつと片手でアレットの前髪をかきあげて、ちゅ、とおでこにキスをした。そうして笑いながらアレットがポケットに入れていた写真——家族の写真。もちろんアレットもにつこり笑ってそこに写っている——を抜き取って、地面に向かって跳んだ。

「待って……ッ！」

「アレット、お日様が出たよ！」

「アレット、早く！」

シャルロットとルイーゼがそれぞれアレットの右手と左手をぎゅつとにぎって、ガラスびんから飛び出したばかりの太陽に飛び込んだ。ああ、朝が来るわ！ アレットは叫んだ——ひよつとしたら、ウサギ耳の、教えてもらえなかった名前を。

イン・ザ・クローゼット 4

「シャルロット、ルイーゼ、——あらあら、アレットまで！どこで寝てるのかしら、あなたたち。こまった子ね、まったく」

アレットはぱちぱちとまばたきをして、はふ、と小さくあくびをした。

「……おはようございます、ママン」

そう言ったのはいいものの、どうしてママンがここにいるのかしら、それに、そもそもここはクローゼットの中なのかしら、外なのかしら、とアレットが首をかしげると、ママンは目の前でこわい顔をしてみせた。

「さあ質問よ、お姉ちゃん！ あなたは一体どこにいますか？」
まだ寝ぼけた頭で、アレットはぐるりと自分の周りをながめてみた。

色とりどりの服が床で山になっている。アレットはその上に寝転んでいて、寝ている内に寒くなったのか、身体の上にもこの間買った白いコートだとか気に入ってよく着ているピンク色のセーターだとかが乗っかっていた。同じ山の中にはシャルロットとルイーゼも、やっぱり服に埋もれて眠っていた。

わたし、どうしちゃったのかしら。アレットはまた首をかしげた。シャルロットとルイーゼに引張られて太陽に飛び込んだ時に、勢いがつきすぎてクローゼットの中に突っ込んでしまったのかもしれない。そうだとしたら、このめっちゃめちな服の山も納得できるとアレットは思った。

どっちみち、クローゼットを荒らしてしまったことに変わりはない。アレットはしゅんと首をすくめて、ごめんなさい、とママンにあやまった。うれしいことに、ママンはため息について、今度からはクローゼットで遊んじゃダメよ、としか言わなかった（もちろん片付けはアレットたちがやることに決まったけれど、そのくらいは

しょうがない)。

ママンが部屋からいなくなると、アレットはため息をついた。クローゼットから落ちちゃったことがばれなくて、良かったわ。

それからアレットは妹たちを起こさないように起き上がって、服の山からカバンに入った大きな本を引っ張り出した。窓を開けて深呼吸をすると、冷たい空気が身体の中に突き刺さるようだった。今日もいい天気みたいだわ。アレットは少しだけ笑いながら、本の表紙を開けた。すると本のページたちは、ウサギ耳の本と同じように真っ白な鳥や蝶になって、太陽の方へ飛んでいった。ひらひらと出遅れた何羽、あるいは何匹かがその辺りを飛んでいるのをながめながら、アレットはポケットをさぐってみたけれど、やっぱり写真は見つからなかった(そう、いくらさがしたって見つかるわけではない。だってウサギ耳があれを持って行ってしまったのだから!)。

「名前くらい、教えてくれたってよかったわ。そう思わない?」

ぼんやりつぶやいた時、ママンが下からご飯ができたわよとアレットを呼んだ。アレットははぁーいと大きな返事をして窓を閉めると、妹たちを起こしに、クローゼットの中に入って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7284c/>

イン・ザ・クローゼット

2010年10月8日15時49分発行